

## 国語教育としての古典と視野

—『平家物語』「妓王」にみる国際性と女性の自立・職業のことなど—

武田昌憲

キーワード 国語教育 平家物語 平清盛 妓王 白拍子

### 1 はじめに

『平家物語』は高校や中学の国語の教材としてよく取り上げられる古典作品の一つである。その中で、今回「妓王」の章段をとりあげて、これまでの文法・時代背景・合戦譚等の趣きとは異なる視点での古典鑑賞を提案してみたい。

この「妓王」は『平家物語』成立の過程で、比較的遅く挿入された話で、出入りが諸本の中で多く、独立した形態を保っていることは既に指摘されている。長門本になく、『源平盛衰記』は巻十七「福原京事」のあとに、屋代本は流布本と同じ位置にあるものの、抜き書きになっている等々である。しかし、『平家物語』の話の中ではなくてはならないぐらい有名な章段であり、京都の嵐山ではこの話の主人公が籠もった祇王寺が、また隣にはこれまた『平家物語』と

所縁のある滝口寺等があることでも知られる。そして季節を問わず、訪れる者が絶えることのない観光の名所にもなっているのはご存じの方も多いことだと思う。

### 2 「妓王」の構造

「妓王」は『平家物語』の中では清盛の悪行譚の一つとして存在する。また単独では女人往生譚の性格をも併せ持つ。ここには平清盛が出家した浄海入道として登場する。権力を握った絶頂期にあり、京都の西八条邸に住んでいる。「妓王」の話はこの西八条邸を中心に展開される。なお諸本により主人公の妓王は祇王または義王など

と表記される。その展開の様子は劇形式で言えば二幕十場（段）に分けることができる。

#### 第一幕・前半 妓王の物語

- 一、妓王一家の栄華。
- 二、仏の西八条邸推参。
- 三、清盛（浄海）の仏への心移り。
- 四、捨てられた妓王の傷心・嘆き。
- 五、清盛からの召し出しと妓王の苦悩。
- 六、妓王の再度の屈辱。
- 七、妓王及び妓王一家の遁世。

#### 第二幕・後半 仏の物語

- 八、仏の来訪。
- 九、仏の懺悔。
- 十、女人往生。

一から七までが第一幕・前半で、妓王の物語。  
八から十までが仏の物語が中心で第二幕・後半となる（注1）

### 3 百石百貫と国際性

この「祇王」の出だしは次のようになっている。

太政入道は、かやうに天下を掌の中に握り給ひし上は、世の誹（そしり）をも憚らず、人の嘲りをも顧みず、不思議の事のみし給へり。たとへば、その頃、京中に聞えたる白拍子の上手、妓王・妓女とて、おととひあり。とちと云ふ白拍子が娘なり。しかるに姉の妓王を、入道相國寵愛し給ひし上、妹の妓女をも、世の人もてなす事斜ならず。母とちにも、よき屋作つてとらせ、毎月に百石百貫を送られたりければ、家内富貴して、楽しい事ならず。

清盛の専横な振舞に白拍子の家族は迷惑を被るものの、清盛の送った毎月の「百石百貫」のために母とちを始め妓王の一族は「家内富貴して、楽し」い暮らしをして満足した様子が伺える。それだけ「百石百貫」の価値は不満の口を塞ぎ、楽しくなるほど莫大だということがわかるのだが、それではどれだけの価値を意識したらよいのだろうか。

まず、百石というのは尺貫法で容積の単位を示すもの。ここでは米（通常は玄米）の単位量をさすもので一石は約百八十リットルとなる。一合の十倍が一升、一升の十倍が一斗、一斗の十倍が一石と

なる。一升瓶、一斗缶などと現在でも日常大人の世界では使用している。また「加賀百万国」などというように近世では大名の知行高（所領高）を表わす語でもあるので、この石（こく）という語は馴染みがあるはずなのだが、大学生を含め、十代、二十代の人にはすでに日常使用しないので馴染みの薄い単位となっている。そのためどの位の分量なのか判然としないのではなからうか。わが国の伝統単位としては是非授業で確認し、教えるというよりも、伝えておいた方が良いと思われる。

次の百貫の貫は錢（ぜに）の単位。尺貫法で重量を表わす単位でもあるが、ここでは通常一文（もん）錢千枚で一貫とする。わが国でも錢の鑄造は早く八世紀から行なわれているし、和銅開宝等、歴史教科書でもおなじみではある。また文学的にも『竹取物語』『土佐日記』等にも錢の記述はあるものの、一般には流通することはなかったとされる。ところが平安末期・院政期から盛んに宋から銅錢が輸入されるようになり、これがわが国では爆発的に流通した。いわゆる宋錢の流通であるが、この錢の価値をこれまでとは異なり、強大な帝国の中国（宋）が保障するのである。これはドルと同じ国際貨幣と考えて良いだろう。少なくとも日本政府発効の貨幣よりも信頼できるということなのであろうか。とにかく、いわば日本経済は初めて一般庶民レベルで国際経済の中に組み込まれたことになる。また錢自体が輸入品・舶来品である。宋錢を手に入れること

は輸入品をも手に入れることにもなる。錢を手に入れることが人生の目的になってしまうのである。

このためわが国は本格的な資本主義経済に突入することになる。この流通の影に平清盛の日宋貿易が大きく関与していたことは重要。その清盛がこの『平家物語』の「妓王」の章段で与えた錢は従って宋錢を意味する。当時は西国や京都を中心として錢の流通が盛んになり、やがて『錢の病（ぜにのやまい）』『百練抄』といわれるような急激な貨幣経済の発展を見る。いわば清盛が錢の使い方日本人に教えたともいえる。それだけ清盛は国際感覚の鋭い人物でもあったといえる。彼はまた音戸の瀬戸を切り開いたり、別荘のある福原の外港の大輪田の泊（とまり）の修築を行ったりして、今日の神戸港発展の基礎を築いた人でもある。その福原へは後白河院も訪れ、宋人と会うなど、国際交易港としてその当時から発展を遂げていた。

「錢あれども用ゐざらんは、全く貧者とおなじ。何をか楽しむとせん。」（『徒然草』第二百十七段）という世の中になっていくのはなら現在と変わらない。

横暴な振る舞いの反面、平家を中心とする栄華はこの国際貿易の成せる技だといってもよい。

いずれにしても中世とは我が国唯一の国際貨幣を使用した経済の時代であったことに注目させたい。二十一世紀の我が国の国際経

済の原点がここにあることにも気づいてもらえれば、古典と現代との距離がぐんと縮まるのではないだろうか。

江戸初期の寛永十三年（一六三六）、江戸幕府による寛永通宝の鑄造をみるまで中世の全期間は中国製の銭の流通による日本経済の営みが行なわれていたことになる。日本は中国経済、ひいては世界経済のまっただ中にいたことにもなることの認識は、少なくとも日本の古典文学での人々の生活が一地域だけに孤立していない状況を思わせて興味を沸くのではなからうか。

#### 4 白拍子と女性の職業

『平家物語』では続けて

そもそも我が朝に白拍子の始まりける事は、昔鳥羽の院の御宇に、島の千歳・和歌の前、彼等二人が舞ひ出したりけるなり。昔は水干に立烏帽子、白鞘巻をさいて舞ひければ、男舞とぞ申しける。しかるを中頃より、烏帽子・刀をのけられて、水干ばかり用ゐたり。さてこそ白拍子とは名づけけれ。

妓王・妓女の白拍子という職業の起源をここでは述べるのであるが、『徒然草』第二百二十五段の白拍子の起源も一般にはよく知られて

いる。参考までに一応掲出する。

多久資が申しけるは、通憲入道、舞の手の中に興ある事どもをえらびて、磯の禪師といひける女に教へて舞はせけり。白き水干に鞘巻を差させ、烏帽子をひき入れたりければ、男舞とぞ言ひける。禪師がむすめ、静と言ひける、この芸をつけり。これ白拍子の根源なり。仏神の本縁をうたふ。その後、源光行、多くの事を作れり。後鳥羽院の御作もあり。亀菊に教へさせ給ひけるとぞ。

『平家物語』と『徒然草』とは発生に二系統あるようにも思われるけれども、女性が男性の装束をして、一種の奇をてらった新機軸の芸能として登場したことは共通するようである。『徒然草』では磯の禪師が娘の静に自分の芸を伝授したように思われるが、『平家物語』でも妓王・妓女の母親のどちから芸の継承を受けての活躍である。しかも母とちの先輩として白拍子の創始者である、島の千歳・和歌の前という二人を出すこと。そして二人の活躍時期が鳥羽院の頃であることを考えると、島の千歳・和歌の前の後継者の一人が姉妹の母とちである可能性が高い。少なくとも『平家物語』では女性の継承者が三代続いていること。しかも妓王一家で登場するのは皆女性ばかりであることから、白拍子の芸能を支えるのは一種の

女系家族であることがわかる。そこには父親や夫の登場する枠はない。男系社会は存在しないし、職業柄、男性は必要ないのである。もちろん経済的にも男性に扶養してもらったこともない。女性は自ら自活していることを示している。既定の職業観にとらわれない、新しい発想で開拓して行く頼もしい女性像が見えてくるところまで説明できると違った授業観になるのではないかと思える。

中世は、といっても院政期ではあるが、このような新しい職業を女性が自ら開拓していく時代でもあった。

また中世においては女性達が積極的になさまざまな職場に進出、或いは歴史の表舞台に登場していく時代でもあった。多くの中世絵巻がそれを示すように、例えば『七十一番職人歌合』に登場する女性達にはその職種三十四種を数えることができるが、ちょうど朝日百科『日本の歴史』中世I-3「遊女・傀儡・白拍子」(一九八六年、二〇〇二年改訂版)にはそれらがすべて掲載されていて読みやすいものとして提供されている。具体的に女性の職業が絵として表現されているのは理解されやすく効果的である。しらひやうし「白拍子」、くせまいまい「曲舞舞」、いおうり「魚売」、たうふうり「豆腐売」、ぬい物し「縫物師」、等に交じって、たち君「立君」、つし君「辻子君」の姿も見える。いわば近世という遊女達であるが、これらも中世においては立派な職業である。自活した女性像を和歌と共に堂々と描く時代が中世である、と考えたい。

また本書によると、中世における女性達の地位はかなり高いものとも思われる。

白拍子をも含む遊び女(あそびめ)は近世でいうところのいわゆる遊女(ゆうじよ)とは性格が異なり、宿の長者の娘が、親が進んで遊び女にする(『曾我物語』)くらいである。そこには教養としての和歌の素養・歌って舞うことができ、読み書きももちろん、美貌であることは言うまでもない。いわば才色兼備の才媛といふべきか、芸能界のもつとも脚光を浴びているスターともいふべき(あるいはそれを目指している)存在である。遊び女が母親であっても貴族としての出世に特に妨げとなることもない。却ってさまざまな身分の人たちを知っているし、その苦労の様を知っているという母親を親に持つ分、世間の苦労をよく理解することができたはずである。『徒然草』第二百六段、第二百七段等に登場する太政大臣徳大寺実基の温厚で合理的な考え方は、彼の母親が「舞女夜叉女」(『尊卑分脈』)であったことと関係があるかも知れない。もちろん女は「借り腹」ということも考えられる。母親の出自は問題にしないぐらい女の身分は低いのもかもしれない。しかし中世の女性は男と対等に主張し、対等に、またはそれを乗り越えて生きて行こうとする。そのすがたの一端を「妓王」でかいまみることができれば、また新しい古典教育の展望が窺えるのではないかとも思う。

## 5 清盛の身勝手さなど

以下、妓王の章段の鑑賞点を数カ所指摘しておきたい。

事件の起こりは加賀の国の出身の新たな白拍子の仏の出現であった。彼女の京都での評判は、やがて彼女の政界随一の実力者清盛からのお呼びがかからないことに対して、仏自らが呼ばれもしないのに参上するという「推参」を清盛に対して行なった。仏の積極的な行動に、独裁者の清盛は、勝手に自邸にやってきたことに対して「大きに怒」り、門前払いの体にする。十六歳の少女が訪問しただけで、まるで後の平家打倒の「鹿が谷」の陰謀事件の発覚を知った驚きにも匹敵するような怒りを清盛は表わすのである。己の予定外の行動をする者に対しての猛烈な抵抗は、独裁者ならではの性格といえる。ところがそれをみていた妓王が気の毒に思い、清盛にせめて仏に会うだけでもいいから会ってくれと理を尽くして頼む。すると清盛は一も二もなく理屈抜きで仏に会ってやることにする。

ところが清盛が仏を一目見るや、挨拶だけではなく、歌を、次いで舞も所望し、たちまち彼女の魅力に取り付かれてしまう。本文は「入道相国、舞にめで給ひて、仏に心を移されけり」と表現するが、『源平盛衰記』では「入道は初めより横目もせず、うちうなづきうちうなづき、よだれとるところたらしめて見入り給へり……横だきにいだきて帳臺の内へ入り給ふ」。『延慶本』では「入道殿二心もなく

見給ひけり。妓王は入道殿の気色を見奉りてをかく覺えて少しうち笑ひてありけり、入道いつしかつい立ちて、未だ舞もはてぬ先に佛が腰にいだきつきて帳臺へ入れ給ひけるこそけしからね」と中年男性のいやらしさを強調している表現が目立つのであるが、この方が実際の描写らしく思える。ところが角川文庫本ではさすがに流布本だけあって、幼童婦女子の読者対象も意識してか、かなり抽象的、また上品な表現にしてある。当たり障りのない無難な表現であるが、清盛の急激な心の変化と本能丸出しで相手の気持ちをも全く考えていない行動が諸本によって異なるという面白さが、古典の魅力の一つであることも授業では理解させてみてはと思う。このように人間の心の移り気さを鑑賞するにはこの「妓王」もうってつけの教材であることは間違いない。この章段には仏の今様歌も載り、日本文化・芸能の知識も確認することもできる。

清盛はすぐに妓王に屋敷から出ていくように命じる。急なことで妓王はなす術もないが、後から入る仏のために自分の部屋をきれい片づけて、妓王に対する恨みの歌を障子に書き付けて退出する。

もえいづるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋にあはではつべきあなた（仏）もいつかは私と同じように飽きられて捨てられるよという意味を含んだこの歌は決して清盛に対しての恨みの歌ではない

いことに注目しなければならぬ。気に入ったものだけを手に入れる。いらなくなったら捨てる、という。まさに女性を物としか見ない清盛。一方、仏も含めて彼女達も清盛を心の通った人間と見ていない。これでは双方恨みようが無いことに気づかせたい。ここでは心の通い会った者同士が理解できる、すなわち人間としての理性を持つことのできる者が通じ会えるからこそ、恨みの言葉を述べることもできることに注意したい。人間どうしだから自分の心が通じ会えるのである。そのぶん清盛の野性じみた本能的行動が人間の心の通いあいを拒絶していることが強調されるだろう。なお妓王の仏に対する恨みは後半、仏の懺悔のシーンで誤解だったことがわかる劇的展開をもみせることになる。

一体、男女の三角関係のもつれはその原因の多くは男性側の無責任にあると思われるが、得てして、捨てられた女性の恨みの矛先はもう一方の女性に向けられる傾向がありはしないだろうか。この「妓王」の章段でもその傾向が垣間見られるのであるが、複雑な人間関係・人間心理の格好の教材にもなると思われる。

次に、捨てられた妓王が母とじのいる京の宿所に戻った翌春、清盛から仏の徒然を慰めるためにと呼び出しがかかる。これに対して妓王は拒絶するのであるが、母とじは渡世術にたけているので娘を得々と清盛の意に逆らわないように説得（これを本文では教訓という）する。清盛との男女の縁のまだ浅くないこと、それに母自身、

清盛の怒りに触れて京都を追放されたくないこと。京都で死ぬことが母の望みであり、今生の親孝行であるし、母が死んでから後の供養にもなるぞという件りは、心根の優しい妓王には拒否できない事柄であったろう。母親の誘導はここでは成功する。ところが妓王が清盛の西八条邸で再度の屈辱を受けて帰って来て、妓王が死にたい（それを聞いた妹の妓女も姉が死ぬなら自分も死ぬと言いつ出す）と言うに及んで、母はこれを思い止まらせるために、子供たちが死ぬば親である自分も死ぬことにする。そうすると、まだ寿命のある親を途中で死なせることは五逆罪の一つである親殺しに当たるので、（親を間接的に殺すことになる）娘の妓王は地獄落ちとなるのがかわいそうだ、という論理を持ち出す。妓王は自分が自殺すれば母も死ぬことになるので、さすがに自殺は思い止まる。そのかわり、一家諸共、京の外に出て出家し、阿弥陀の世界に行けるように念仏を唱える生活へと大きく方向転換する。俗世間をよく知っている母親の説得が、却ってどれほど悩んでいる娘の妓王を苦しめていることか。世間の常識「長いものには巻かれる」式の親の説得の危うさは、当座は逃れることができるかも知れないが、実は子供の悩みの根本の解決には（教育には）なっていないのではないだろうか。母の説得の問題は現在の親の問題でもある。

後半部分はこの草庵に仏が懺悔のために訪問し、やがて妓王・妓女・とじ・仏の四人で極楽往生を願ってその通りとなるというもの

だが、仏の劇的な草庵への登場ぶり、また劇的な仏の出家・懺悔のさまはもはや言を要すまでもないだろう。

なお女人往生については中世文学を初めとして盛んに言われているので割愛させていただく。厭離穢土・欣求浄土の問題とも絡んで、仏教を一つの絆として恩讎を超えての彼女達の往生は絶対に清盛の行くことのできない世界（極楽）への跳躍にもつながる。この点、別稿を期したいと思っている。

次に妓王と仏の二人の性格であるが、これもよく指摘はされているが、妓王は王朝的な女性で、受け身ではあるが仏の清盛邸来訪の折は清盛に会ってくれるように頼むなど優しい心の持ち主。しかし、清盛に追い出されて心理的に立ち直れない。一方、身を投げようと言い出したり、出家するなど、意外と過激な（？、それだけ追いつめられた心境でもある。自殺する生徒の心境と似ているかも知れない）一面も窺える。一方の仏は事態の前へ前へと進めていくタイプで中世的な女性。思いきり良く、恐れを知らないさっぱりした性格といえる。もちろん仏の部屋に書き残した和歌の意味をすぐに汲み取り、事態（誤解）の打開に対処しよう（結局、出家の道を選択して清盛の手から逃れる）としている積極的な様子も見て取れる。本章段の事件展開で重要な要素をなす。

また本章段全体として、季節観がうまくつながり、物語の興を添えていることも重要。第一段「妓王一家の栄華」では三年の歳月が経

過するが、第二段「仏の西八条邸推参」と第三段「清盛（浄海）の仏への心移り」は和歌の季語等から秋。第四段「捨てられた妓王の傷心・嘆き」は秋から冬（年末）。段五段「清盛からの召し出しと妓王の苦悩」第六段「妓王の再度の屈辱」と第七段「妓王及び妓王一家の遁世」は翌春のこと。第八段「仏の来訪」は後半の場面に移り、「かくて春過ぎ夏長けぬ。秋の初風吹きぬれば、星合の空を詠めつゝ、天の戸渡る梶の葉に、思ふ事書く頃なれや」と、春、夏を越し、秋の星合の空（七夕・七月七日）という俗世間ではロマンチックな夜の出来事となる。第九段「仏の懺悔」もこの夜の事。最後に順序に遅速はあれ、皆往生を遂げるといふ第十段「女人往生」にたどり着く。事件展開は秋に始まり秋に終わるといふ計算された季節観であることも気がつかせたい。

以上、いろいろ述べてきたが、教材研究に『平家物語』そして本章段を是非生かしてもらえればと思う。

注（1）この二幕十場に関しては故梶原正昭先生から御教示いただいた。

『平家物語』の本文の引用は 入手しやすさを考えて角川文庫『平家物語』（上・下）佐藤謙三校註（寛文十二年平仮名製版本）によった。



〔付記〕

本稿は平成十四年度茨城県高等学校教育研究会第三学区国語部研究協議会の会場校（鉾田第一高等学校）で講演をする機会を得た時の講演内容を加筆・補足したものの一部である。

会場校の先生方及びご出席の先生方には大変お世話になりました。ありがとうございます。